■ 続・らくだ日記（九十七）　佐怒賀正美 ■

死の灰のふる夜甘藍踊りだす　石原八束

（昭和二十九年作・第一句集『秋琴集』所収）

石原八束先生が逝去されてからすでに四半世紀経つ。先生の謦咳に接した方も少なくなってきた。一方で、新しい方もだいぶ増えたので、今年は石原八束先生の句集を新たに読み解く企画を進めたいと思い、さっそく先月号から何人かの同人に順に執筆をお願いすることにした。新しい代表句が発掘されることを期待しながら。

今回の鑑賞の中で、この句を引いて鑑賞されたのは編集長の安達昌代さんであった。俗な言い方だが、「目から鱗が落ちた」思いであった。以下に、鑑賞文を引いてみよう。

「『死の灰』は雪のようにどこからか降ってくるのではない。言うまでもなく、人の手によって原子爆弾から放たれた放射性物資である。その灰を浴びた畑のキャベツが、死のダンスさながらに暗闇の中で蠢きだす様はシュールレアリスムの世界観を彷彿とさせる。

キャベツは昔から欧米に於ける多産のシンボルとして、葉の重なりから赤ん坊が生まれるという逸話を持つ。（中略）同句集の〈原爆地子がかげろふに消えゆけり〉が失われた命に向けられたものなら、掲句は未来の命に注視していると言えるのかもしれない。」

このキャベツは歳時記に従えば夏（初夏）の季語になるが、本句では季節感よりもその奥に込められた暗喩的な生の意味が引き出される。もとより、キャベツは夏でも冬でも春でも出回っているし、畑にはいつの季節でも育っている。私の生活感からはむしろ夏の季節感は薄い。

それはともあれ、「甘藍躍りだす」はもちろん実際にはあり得ないことで、作者の意識にひらいた超現実のカリカチュア的な風景だ。生命の危機感が臨界点を超えて、一気に狂の世界へ脱け出そうとしているようでもある。市井に出回っているキャベツは一、二枚の葉でくるんだつるんとした一個が多いが、畑のキャベツは葉脈の浮き出た外側の大きな葉が幾重にも包んで野性的ですらある。本句では、畑に何百と犇めくその多数の命が、正気を忘れてしまったように踊り始めてしまうというのだ。

提示された超現実的な虚の風景を暗喩あるいは意識変容の産物として、自然に受容された安達さんに改めて感心した。天上の八束先生も微笑んでおられることだろう。改めて、この句を『秋風琴』の代表句に加えておきたい。

■ 続・らくだ日記（九十六）　佐怒賀正美 ■

遠逝を生きて今此処大花野　救仁郷由美子

（「豈」66号特集「救仁郷由美子全句集」）

救仁郷由美子氏は一昨年七十二歳で逝去された。「豈」での安井浩司論に惹かれていたのだが、今回「豈」誌上での「全句集」によって、作者の俳句を見渡すことが叶った。

出発点は日常生活の哀歓に始まり、子どもを含む懸命に生きる者への共感、そして社会批評・人間批評と多様で、切実な心情が独自の認識と現代詩的文体で読者に届く。

たとえば、日常生活であれば、〈相槌に愛の破片の寄せ木あり〉〈さびしくて野分きと交わす叫び声〉〈記憶燃え狂った春を待つ私〉と心情を造形化して強く訴える。

子どもの句では、〈子は眠る明日は幾重も与えたし〉に始まり、〈青野走る殺しかけても児は走る〉という異様な明るさをはらむ愛情句まで詠む。児は懸命に喜々と生きのびる。

社会・人間批評句では〈何は無しプルトニウムと地獄絵師〉の諧謔、〈風を描く愛から遠いいあんふの指〉〈プライドを異臭の衣込め宿なき人〉など社会的弱者への共感。そして、昨今のガザを思わせるような〈虐殺逃れ少女の飢餓よ日輪よ〉は、叫びに近い強烈な救済への祈りでもある。

句集の途中からは、（おそらくは闘病の）内心的風景句が増えてくる。〈脱髪の脱身心や水面の月〉〈遁れ端の痛みは白き曼殊沙華〉〈僻んだ心痛み痛みて満月よ〉〈羨めば醜い貌鳥捨て往こう〉など心との対話を独自のイメージに結ぶ。〈怖いと泣く子どもじぶんの子守唄〉に至っては、恐怖心に対して泣き叫ぶしかない。その泣き声は幼少の時分の子守唄の記憶と重なりながら、やがて泣き疲れて寝落つ。

もう一つの主題は、それらと無縁ではない「生と死」。〈垂直に流るる現世死の水平線〉〈萩の野に生酔無死の小屋一軒〉〈水包む少年のうつぶせのゆらめき〉〈生と死と虹はその色分けにけり〉〈さくらちる雨滴はげしき泥の川〉など。形而上的な捌きもあるが、現実へ引き寄せたイメージ構成には、深い思索性を備えた独自の美意識をも見る。

冒頭の句はこの流れの中に入るであろう。作者は「遠逝」という疑似彼岸の世界を生きてきて、今ようやく「此処」である現世の「大花野」に辿り着いたと。その終末意識には、芭蕉の枯野句とは対蹠的なベクトルを見る。不思議な幻想的実感とでも言いたい時空の終着点として、作者は此岸の「大花野」に救済されたのであろうか。〈葉桜の木の間漂う宇宙母顔〉という不思議な句と併せて、作者の宇宙意識を垣間見た気がした。

■ 続・らくだ日記（九十五）　佐怒賀正美 ■

またたきに律あり呂あり寒昴　檜山哲彦

（合同句集『塔　第十一集』）

昨年十一月に「りいの創刊十五周年記念祝賀会」にて久闊を叙したばかりの檜山哲彦氏が十二月三十日に逝去された。七十一歳は早すぎた。いまは、神保町「銀漢亭」での「白熱句会」に同席できたご縁に感謝するのみ。作者は昭和二十七年広島生まれ。ドイツ文学者であり、また俳人として沢木欣一「風」を知る貴重な一人でもあった。

第一句集『壺天』（平成十三年）では、大方は素朴な客観写生から〈恋の鵜雀を池にはたき落とし〉〈幹ぢかに花を噴き出す老桜〉〈シュトルムの杯にとびこむ金の蜂〉〈霧吐いて霧に埋もるるライン河〉〈水母といふ一氷片を手渡さる〉〈青嵐や百穴の向きてんでんに〉などを得ていた。

また、第二句集『天響』（平成二十四年）では、〈桃の実のまはりやまずよ富士の水〉〈花穂高くおほばこ風を見つけたり〉〈月の蝕毛虫の糞のふとかりき〉などの客観的写生に加えて、主観を加えながら〈冴ゆる夜の天地すれあふ音すなり〉〈吹きやみの風をさがすよ子猫の尾〉〈日の落ちて匂ひのほそし春の風〉〈大蚯蚓伸びては雲を奔らする〉〈風すすぎ鵜の声まつすぐに〉〈風青くちぎれて蝶を生みにけり〉などこの句集の中核ともいえる上質の感覚句を得る。五感を駆使し万物照合的な広やかな世界を現出した。動物が活躍するのも氏の作風の特色。加えて、〈金目鯛まるごと煮たる明るさよ〉〈マント脱いで花束贈呈といふ大役〉〈ぞんぶんに伸びて四温の猫となり〉などのユーモアも味があり温かい。良質の抒情句と言えば、〈星合の空をあふれて風降るや〉〈帰り来て木犀の香の髪ふるふ〉〈流れ星見て来し眼うひうひし〉〈龍天に登るや校歌新しく〉なども印象的だ。

その後の作については次の遺句集を待ちたいが、最近の作からは、〈鯉の子に鯉の貌現れ木の芽風〉〈寝よゆれよ白鳥大いなる卵〉〈浪に削げ巌の貌なる鬼虎魚〉〈鳥渡る天に親波子波かな〉〈まづ尻を試し寄居虫をさまりぬ〉などの観察と共に時に大胆軽妙な俳諧への捌きなどに唸った。

上掲の句は、寒昴の星の光の視覚的なニュアンスを、「律」「呂」という音への広がりを持つ語で表現した。言葉の引き寄せ方に作者の心が映っている。合同句集に載せた「天空たかく心をひらき」という自己紹介のエッセーにも、作者の抒情の在り方を改めて思った。各論はまた別日に綴りたいが、まずは何よりも衷心からご冥福を祈る。